

フランスの山岳文学

篠田知和基

な人生の苦難を表す観念でしかなかつたのだ。²

しかし、山が、アルピニスムとしてであれ、避暑や、療養のためである、何らかの形で都会人の生活に入り込んで来るようになると、其処での村人の生活も含めた、本質的な山の文化の理解と吸収が文學においてもなされるようになる。山住みの作家も増えてくる。ジヤコテの詩を都會の雜踏の中に想像することは難しい。ジオノやボスコが都會の生活を描いたらどういうことになるのか、だいたいそんな必要があるのだろうか。スイスの作家ラミュスに修行のためにパリにて傷だらけになる山の画家の話（「エーム・パシユ」）がある。カナダのガブリエル・ロアの「秘密の山」でも、誰にも習わずに山を描いていた素人画家が、奨学金を貰つて、パリに修行にて、結局、山を見失つてしまふ話だ。³自然の山野にあこがれながら、パリの屋根裏で寒さに震えている芸術家たち。ボーデレール描く、雨樋のなかの猫（「スプリーン」）だ。ボスコの魔術師シプリアン、ジオノのアントニオ（「この世の歌」）などをパリに住まわせれば、水からあがつた魚で、同じようにぼろぼろになり、薄汚くなるだけでもなく、其処に登る人の山でさえなかつた。それは、ロマンチック

本質的に都會の文學であり、宮廷の樂しみとして發達したフランス文學に「山岳文學」と言いうものがあるだらうか。

もちろん、あるとすれば山の發見、自然の發見、地方文化の發見が其処では前提となるだらう。都市や宮廷の文化が確立される前の中世の文學に山の描写が少ないので、「山の發見」が、ペトナルカ、或いは、オラース・ド・ソシュールに待たなければならなかつたらだ。

ソシュールによるモン・ブランの發見は、ロマン主義の作家にアルプス趣味の流行をもたらした。ユゴーもデュマもサンドも皆、きっとアルプスに旅行する。そして、それぞれに旅行記を表した。しかし、それが、本当に文學に取り入れられるには、さらに一世紀が必要だつた。

ロマン主義の時代の「山の少女セリーナ」（デュクレ＝デュミニル）と言つたメロドラマにしろ、或いは、ラマルチースの「ジョスラン」にしろ、山は其処に住む人にとっての山でないのは言うまでもなく、其処に登る人の山でさえなかつた。それは、ロマンチック

あろう。人間が自然の中でどれだけ美しくなれるか、どこまで自然と張り合つて、力を發揮できるか、どこまで、自然の秘密に迫ることができるかを追求する作品が山や海や森でなくて、どうして、都会を舞台にできるだろう。マックス・シャンソン(アルドベール)の「砂漠の中の島」(一九五七)は、都会を砂漠、山を聖域すなわち「島」としてとらえた作品だ。主人公たちは、都会での偽りの生活を逃れて、山へ回帰し、生と死のぎりぎりのはざまに本当の人間関係を見いだそうとする。

もちろん、だから、海でもいいのである。海のテーマはフランス文学では早くからさかんに開拓されている。しかし、聖性を求めてひたすら高みをめざす山の世界と、水平面にしがみつく海の世界では、人間の行動域の次元が違うと言つてもいい。

フランスでは、海に比べて、山が文学に取り入れられるのは遅かった。しかし、登山小説の書き手としてのエルヴィイウ、カゼラ、から、フリゾン・ロッシュ、そして、デルヴェタスにいたる作家の存在は、フランスにも山岳文学が存在することを確実に示している。主人公ははじめはガイドが多かつた。ガイドでなくともガイドに導かれた都會の登山客だった。が、やがて、ガイドなしの単独行の時代がくる。はじめは、登山小説の主たるテーマは事故で、エルヴィウの短編集のタイトル「人殺しの山」が示しているように、山に挑んだ若者が、みな、山や天候の犠牲になつて死んで行く。フランスの登山史では女性の存在も大きいが、登山小説に女性が出てきて

未踏峰を征服したり、事故にあつても見事な冷静さと持久力を示して耐え抜いたとか、外国の山への遠征で、女性隊員がチームの和を作るのに貢献したとかという、あつてもよさそうな話がほとんどない。男ばかりの世界で、女性との愛は登山への情熱と拮抗するか、登山の邪魔になるかである。ともに山に登つて、困難をともにするうちに結ばれたカップルの存在はよく描かれるが、そのなれそめを登攀のプロセスの中に設定して、ともに頂上に立つたときに二人の唇が合わさっていたという作品はない。

(サンドの「ジャン・ド・ラ・ロッシュ」は、まさに険しい山の頂上で二人が結ばれる話だが、青年は憧れの女性を駕籠に載せて頂上までかつぎ上げなければならない。マルセル・サヴォアの「吹雪の中」では、山小屋に滞在する間に愛が芽生える話だが、男が、吹雪の中で命の危険を冒して女を救助して、その後、女が体調が回復するまで山小屋にとどまるのが、なれそめのもとというのだから、やはり、対等な登山者同士の愛ではない。ペイレの「マッターホルン」では、どうしても山に登りたいという金持ちの女ケイトを、主人公が、自分の命を危険にさらしながら殆どかつぎ上げるようにして登らせる話で、そもそもここでは、主人公とケイトは結ばれない)。

山を舞台にした恋愛小説としては(悲恋の方がおおいのは言うまでもない)トゥリエの「秋の恋」などがあるが、いわゆる登山小説ではない。山を使った推理小説としては「メイジュの事故」(ブリ

ユール）が代表的で、ここには山の観察もテクニックも十分に活用されているが、推理小説としては、特に山である必要もなさそうである。

山の中に自然の楽園や神秘な場所、或いは、人間の本来住むべき場所を探し求める作家としてはボスコ、ジオノ、ジャム、そして、アンドレ・シャンソンをあげることができるだろう。その場合にはいわゆる里山、或いは、散策の山で岩山はあまり出てこない。

山の人生を描いた作家としては、スイスのラミュス、オート・プロヴァンスのプロアルの他に、サヴォアのアンリ・ボルドーもいる。ボルドーについては、ベストセラー作家として、また、いささか安易な登山小説の作家として、評価に留保をする向きがあるが、「ダム」「死んだ家」など山村の生活を描いた地味な作品にすぐれたものがある。

そして、山を精神的な試練の場所としてとらえた、（森敦の「月山」にも比すべき）作品として、ブリオンの「山の彼方」（一九七二）、カナダの作家ガブリエル・ロアの「秘密の山」、同じくケベックのシュザンヌ・パラディの「叫び」、あるいはメイジュの麓に住むソニエの「奇妙な戦い」などもある。

それをさらに進めて、山を超自然との対決の場とした幻想文学にはエルクマン・シャトリヤンの「狼のフーゴ」から、サンドの「ローラ、クリスタルの旅」、ミッショエル・ベルナノスの「死せる命の山」などもあげができる。

「オーベルマン」から、ミシェュレの「山」にいたる山の思索、ソシユール、ラモンらの山の自然誌、エルゾーグらの山の登攀記録、そして、ペルティエからジヤコテに至る山の詩を持ったフランス文學に「山」はすでに圧倒的な重みを持つて、存在しているというべきだろう。

「山岳文学序説」において、島本恵吾は一冊の洋書を手にして、その見返しに英語で「カントエングンガ峯の二万フィートの暴風雨の中でこの書物を唯一のなぐさめとし」たと記してあるのを見て、「心に深い衝撃をうけ」「我が、日本の文学には、かかる峻峰の大暴風雨の中に読むにふさわしい」ものはひとつもないと感じたと書いている。書物はシェクスピアであった。「オセロの悲しみモリヤ王の怒りもマクベスの宿命も、それぞれ宇宙的なものに成長し、暴風雨と共に荒れ狂っている」。著者はその書を手にして、「本文の至る所に引かれたアンダーラインから、かの超越的な風のうなりを少しでも聞き出そうとするかのように心引かれて眺めいった」「この気分、かかる超越を取り上げ、日本文学の中から、たとえ少しでもそれらしいものの痕跡を探り出そうと言う気持ちが私を山岳文学研究へと向かわせたのである」と、著者はしめくる。そのような「超越的な風のうなり」を聞く作品はフランス文学ではないだろうかと言えば、決してそんなことはないと、人はそれぞれに、バルザックなり、ユゴーなり、スタンダールなり、或いは、サン・ジョン・ペルスの詩なりをあげるだろう。フランス文学は決して宮廷のものだ

けではなかつた。現代でもたとえば、ジオノの作品にはその種の壯大さ、雄勁さが感じられる。

フランス文学史は中世末、十二—十三世紀からはじまる。年代記、ファルスなどもあるが、中世を代表するジャンルは武勲詩などのいわゆる説話だろう。武勲詩、叙事詩は詩の形を取つてはいても詩ではなく、調子をつけて朗唱する語り物である。さらにラテン語の説話集もあるが、フランス文学史としては、多少留保しておこう。フランス語の説話では、しかし、山の文学の存在はあまり顯著ではない。メリュジーヌ物語と俗に言われる「メリュジニヤン家のいとも高貴なる物語」⁸の後半、「出っ歯のジョフロア」の武勲のところで、山がでてくるのと、アーサー王物語りの異伝のひとつで、「猫が岳」物語りが出てくる他は、少し時代が下つて、アントワーヌ・ド・ラ・サルの「シビル女王の物語」に後に「タンホイザー」として知られることになる山中秘境譚が語られるくらいである。

シビル女王は、エルサレム女王シビルを思わせる名前で、そうであれば、メリュジーヌ物語に出てくるリュジニヤン家のギーが結婚した相手である。女王たちが、金曜には毎週蛇になると言う話にしても、メリュジーヌ物語との接続は濃厚と思われる。山の中の洞穴に住んでいると言う設定も時代が下る割に本来の民間の伝承を思われるところだ。民間伝承の妖精は山の中の洞穴に住んでいる。宮廷に住むようになるのは、「妖精物語」と称する物語の中のことと、本来の妖精は野生のもつと恐ろしいものだ。彼女たちとの接触も牧

童が主で、山の放牧地の牛番をさせられている青年がふと迷い込んだ洞穴で、妖精の歓待を受けるが、見てはいけない寝姿を見るといつた禁忌背反を冒して洞穴を出される。妖精の洞穴では、彼は性的な歓待をうけるのだが、人によれば、金貨銀貨のつかみ取りということもある。その場合、欲を出しすぎて洞穴から出られなくなったり、途中で見てはいけないと言うのをつい見てしまつたら金貨が皆木の葉になつていたとか、日本の化かされ狐の話でなじみの話柄がおおい。

後の妖精物語に近い話で、虐待されている継子の女の子を助ける妖精は牛と関係が深い。牛番をしながら糸を紡ぐように言われている娘のところへ忽然と現れて助けてくれる妖精は牛に乗つて現れる。牛の角に紡ぎ棹を結んで糸を紡ぐ。平地の伝承では、牛の右の耳から入つて、左の耳から出ると、糸が全部紡がれているなどというのもある。紡績と牛は関連がある。牛が犁を引いて畠の畝を往復する動きと、機織りのおさが往復する動きとが、関連して想像される。紡績と農耕とは時期を同じくして人間の文化に導入される。蛇のほうはそれよりも少し古態の文化を思わせる。山の伝承で多いのは、もちろん熊だが、説話では熊の分布は濃くはない。エックス・レ・バンの湖のほとりにそびえる「猫が岳」についての伝承は、民間伝承では珍しい話だ。

アーサー王が、イタリア遠征の途中、その地を通りかかつて、（レマン湖のほとりという版もある）其處に出没する化け猫を退治

した話だが、その猫が山になったのが、「猫が岳」だという。⁹化け猫の話は人狼の女性版でよく出でて来るが、はじめから猫の姿をした妖怪は珍しい。しかも湖の猫は漁師が湖でつり上げたというのだからますますもつてオリジナルである。普通の伝承では、「魚の王」¹⁰というのを漁師がつり上げ、放してくれたら願いがなんでもかなうようにしてやろうといわれる。ここでも、放してくれと言うのである。或いは、教会に捧げものにしようとのもある。それが三度繰り返される。三度目に魚が猫になる。その猫が、うちへ持つて帰ると、どんどん大きくなつて、飼つていられなくなる。其処で、山へ行つて放すというのは日本では「蛇息子」の話形である。山へ放された猫は其処で、旅人を取つて食うようになる。それをアーサー王が退治する。或いは、家来が一人派遣されて、特別な籠を作らせてその中に待ち伏せして囮作戦で退治したというのもある。退治された猫が忽然と消え失せてそのかわりに其処に今まで見たことのない山ができたというのではなく、猫は実はそのあたりの山に住む悪魔で、猫の姿をしているところを退治されて、本来の住処に戻つたということらしい。いずれにしても、山に潜つて見えなくなる。その後その山が猫の姿に見えてくる。

山が何々の姿に見えるというのでは、巨人が肘枕で寝てゐる姿とか、禁じられた恋の二人が抱き合つてゐる姿だとかいろいろあるが、猫というのは例がない。日本では、竜の爪の形をした竜爪山とか、或いは春の残雪が馬の形で見える駒ヶ岳だとかはあるが、あとは剣

嶽とか槍が岳、或いは、岩肌の色から赤石岳、雪の色で白山、などと云ふ名前がある。しかし湖の猫は漁師が湖でつり上げたというのだからますますもつてオリジナルである。普通の伝承では、「魚の王」¹⁰というのを漁師がつり上げ、放してくれたら願いがなんでもかなうようにしてやろうといわれる。ここでも、放してくれと言うのである。或いは、教会に捧げものにしようとのもある。それが三度繰り返される。三度目に魚が猫になる。その猫が、うちへ持つて帰ると、どんどん大きくなつて、飼つていられなくなる。其処で、山へ行つて放すというのは日本では「蛇息子」の話形である。山へ放された猫は其処で、旅人を取つて食うようになる。それをアーサー王が退治する。或いは、家来が一人派遣されて、特別な籠を作らせてその中に待ち伏せして囮作戦で退治したというのもある。退治された猫が忽然と消え失せてそのかわりに其処に今まで見たことのない山ができたというのではなく、猫は実はそのあたりの山に住む悪魔で、猫の姿をしているところを退治されて、本来の住処に戻つたということらしい。いずれにしても、山に潜つて見えなくなる。その後その山が猫の姿に見えてくる。

山が何々の姿に見えるというのでは、巨人が肘枕で寝てゐる姿と

いる。

落石の話としては、ある時、山の牧童が上方で、「もう駄目だ、おとすぞ」と言う声がするのを聞く。あまりうるさいので、「勝手にしろ」と怒鳴ると、とたんに大石が上から落ちてきたという。アーヴィングの「アビーム」¹¹は、アビーム（深淵、地獄）と呼ばれて、絶えず、怪異の起ころうとする場所とされているらしい。このあたりの話は、アンリ・ボルドーが、村の呪術師の黒魔術の話と絡めて「命のノートル・ダム」に描いている。

落石の話としては、ある時、山の牧童が上方で、「もう駄目だ、おとすぞ」と言う声がするのを聞く。あまりうるさいので、「勝手にしろ」と怒鳴ると、とたんに大石が上から落ちてきたという。アーヴィングの「アビーム」¹¹は、アビーム（深淵、地獄）と呼ばれて、絶えず、怪異の起ころうとする場所とされているらしい。このあたりの話は、アンリ・ボルドーが、村の呪術師の黒魔術の話と絡めて「命のノートル・ダム」に描いている。

これらは地名伝説だが、どこにでもある基本的な山の神話として、山の精霊が地崩れを起こすと言う話はよくあり、「猫が岳」の近くのグラニエ山は一二四八年だかに稜線の三分一位が崩壊して、麓の村を埋めてしまつた。そのときに、ミアンの村はずれの教会の聖母像が其処で岩石の転落を止めて、村は奇跡的に災禍を免れたという。以来、其処では、そのときの聖母像を祭つているが、これが、黒聖母で、特に靈験あらたかだという。また、崖崩れで埋まつたあたりは、「アビーム（深淵、地獄）」と呼ばれて、絶えず、怪異の起ころうとする場所とされているらしい。このあたりの話は、アンリ・ボルドーが、

ループスでは、褶曲と断層が重なった造山活動の結果か、切り立った断崖が多く、よく落石、地崩れがある。岩山に登る場合も叢のようにはしきりなしに落石が襲つてくることがあり、今はアルピニストはヘルメットをかぶつて登るのがふつうになつていて。其処で、これを山の精霊の悪戯と解釈する伝説ができるわけで、アトラスの系統の山を支える巨人の伝説と考えてもいい。山の形成の過程については、やはり、人が石を落としたとか、踏ん張ったとか、と言う「だいだらぼっち」伝説が、ガルガンチュア系統の話として伝わっている。また、「おとめ岩」といった名前の山については、娘が悪漢に襲われて、神の加護を祈つたところ岩に変わつたといったはなしもある。ただし、性器の形を想像させる男岩、女岩の伝承を教化的に改竄した伝説である場合もあるうかと思われる。¹³

山の妖精が洗濯ものを岩に干すという伝承は日本の山姥譚を思わせる。酒呑童子、金太郎などの伝承もヨーロッパにおいては山岳地帯の伝承として語られる。或いは、ブリアンソンの伝承だが、山の中の烟で蛇が出て困るので、とある聖人に頼んだところ、聖人が蛇の群に向かつて、説教をして、村境につれていくて、ここからこちらは人間の世界、ここから向こうは蛇たちの領地だと言つたという話もあり、これは、まさに、日本の夜刀の神の伝承である。或いは、ピレネの伝承で、大蛇が人を食つて困るので、鍛冶屋が真つ赤に焼いた鉄棒を呑ませて退治したと言う話も、日本の各地の大蛇退治に使われるモチーフである。¹⁴ 山姥でも蛇でも山岳地帯の伝承は日本の

民間伝承と共に通するものが多。平地よりも古態の伝承を保存しているからかもしれない。或いは、山地の先住民族が日本のほうに口承の文化をもたらした民族と関係があるのかも知れない。

昔話の世界では悪魔の住まいである「黒山」或いは、どうしても登れない「ガラス山」などが出てくる。これは山岳地帯特有の物語と言うより、どこにでもある象徴的な物語である。悪魔と約束をして、黒山まで行かなければならない主人公が、鳥の助けで山に登る。山の中には悪魔の住まいがあつて、其処で悪魔が、様々な試練を青年に課すのだが悪魔の娘が手伝つてくれて切り抜けて、最後は彼女とともに逃げ出す。日本のオオクニヌシとスセリ姫の物語である。

ガラス山はその試練の中にも出てくるが、また、他の物語の試練としても使われる。要するに、ガラスでできた山のてっぺんに鳥の巣があつて、その巣の中の卵を取つてくると言つた試練で日本では「鷺の卵」を松ノ木のてっぺんに登つて取つてくる話になる。ヨーロッパでこの場合に特徴的なモチーフは、「骨梯子」で、悪魔の娘を窯ゆでにしてその骨を並べて梯子にする。あとで、もう一度骨を釜に入れて煮ると娘が元通りになる。

ルネサンスではロンサールやデュ・バルタスが山を歌つているが、ペルティエの「サヴォア」が山岳地帯の絵巻として山の諸相をよくとらえている。ペルティエと言う人は、リヨン詩派の閨秀詩人クリスティーヌ・ド・ピザンに言い寄つてすぐなく断られたことで知られる詩人だが、当時の皇太子妃に捧げた長詩で皇太子領のサヴォア

を歌つて、アルプスをはじめて本格的に歌つた詩人として歴史に残ることになった。¹⁶その後、十七世紀は山はおろか、自然への関心がさきわめて薄い時代だった。自然への回帰はもちろんルソーの時代を待たねばならない。ルソーの「新エロイーズ」は山の生活を賛美しているが、山間の村に純朴な風俗が保たれているというもので、山 자체の賛美ではない。

それに対して、オラース・ド・ソシュールの「アルプス紀行」（一七七九—一七九六）、ラモン・ド・カルボニエールの「ピレネ観察記」（一七八九）はまさに「山の発見」に連なる文章だ。その後、作家たちが競つてアルプスやピレネを訪れるが、作品として山が本格的に舞台に使われるのはラマルチーヌの「ジョスラン」である。

しかし、これにしても、また、山を舞台にしたメロドラマ（フランス語で言うメロドラマとは、冒険活劇と言ふ意味だが）の「山の少女セリーナ」などにしても、「文学」の名を冠して語ることは躊躇われるようなものではないだろうか。

むしろ、このころ、どうしようもない通俗読み物としてまともに扱われなかつたアルランクールの「孤独者」「背教者」などに今の劇画のようなさわやかさを覚えるのはどうしたらいいだろうか。同じく通俗と言つてもつまらない感傷性がないだけ、「アロイス」などより助かるのである。「孤独者」は一代の霸者シャルル豪胆公が死んだと思われた戦場から奇跡的に抜け出して、スイスの山中にこもつて、村人たちの守護神になる。そこに、彼を親の敵として呪つ

ている孤児の娘が登場、シャルルと恋に落ちると言う話で、荒唐無稽と言えばもちろん荒唐無稽である。しかし、このアルランクールを文学者の敵のようにみなして攻撃していたサントリーブーが実は、当の作品を読まずに批判していた形跡があると言うことなどがわかつてみると、結局はサントリーブーも仲間の結束力と権威を笠に着ての弱いものいじめでしかなかつたようにも思えてくる。「孤独者」は、なかなかおもしろい。ユゴーの「城主たち」でも、死んだと思われたフリードリッヒ赤髭公が現れる。それよりはアルランクールのほうがまともである。因縁話としても、「城主たち」で、主君を殺そうとする若者が、実は相手の実子であることがわかつたりするのよりは、まだ本当らしい。

山岳紀行では、そのユゴーのものより、ゴーティエの「月曜散策」のほうが評価は高い。その後は例のスイスのテプファーの「ジグザグ紀行」になるが、そもそも紀行がそれだけで文学になるのかどうか微妙なところである。²⁰

フランスでははじめて八〇〇〇メートルを超えたアンナブルナ遠征隊のエルゾーブの登攀記が数百万部売れよく読まれているが、同じ遠征隊の一員、レビュッファの山登りの技術教本が文学でないのなら、エルゾーブに至つてはと言う見方もできなくはない。もう一つ、これは日本で翻訳があるが、テライの「無用さの征服」となると、エルゾーブの弟のテレビ作家が手を入れてまとめた本で、テラ

文学としてはサンドが大いに山を取り上げる。論者によつて、取り上げる作品がかなりばらついてゐるが、「アンディアナ」などの初期の自伝的色彩の強い作品で、ピレネの自然の雄大さに感激するところ、中期の「コンシュエロ」で山の中の城にこもるフス派の人々の物語、そして、オーヴエルニユ三部作で、山の生活を描いたところなどが、おおむね取り上げられる。その中では「ジャン・ド・ラ・ロッシュ」が、実際に山に登るところを描いていて、物語りとしても山頂でクライマックスを迎える。ただ、それより、山の地崩れを描いた「巨人イエウー」、玄武岩の崖に取り付いて、オルガンを演奏するつもりになる狂った音楽家の話「巨人のオルガン」、そして、水晶やアメジストの結晶を見つめているうちに水晶の世界に引き入れられて、鉱物のミクロの世界で山登りをする「クリスタルの旅」などに山の世界が見受けられる。

このころでは、ネルヴァルが山に関しては重要であると言うと意外に思われるだろうが、これが事実なのだから仕方がない。東方の旅ではレバノンの山の冒險を描いた章が圧巻であり、「オーレリア」では、夢の中で、高い山に登つて、てっぺんから、山の中に下つて行くところで、「神秘の都」に到達する。其事が、後に、「高くて深い塔のなかで登り下りを繰り返す試練になる。或いは、オーレリアを求めて石ころだらけの山を登つて行くとやがて夜になり、「もう遅い」という声がきこえるところ、そのオーレリアが、洪水の世界で、其処だけ残つた山の頂にたつて、助けを求めるところ、いず

れも、夢の遠近法によつて、現実離れた寸法のトリックがあるが、夢の論理を現実に翻訳すればやはり、山登りの光景に違いない。現実と言うなら、「オクタヴィイ」は現実のヴェスヴィオ噴火を踏まえていることになっている。夜中に噴火があつて、朝、ポシリポに登つて、火山を眺める。そのとき、なぜともなく、急に悲しくなつて、崖から身を踊らせて死のうとする。

愛されていない。この世でもつとも美しい光景のなかにいて、自分だけ愛から疎外されている。其人は、山に登つたときの努力の後の虚脱感かもしれない。

詩のほうでもデュ・バルタスに倣つてと言つて、古代の怪物の骨にたとえた雪を戴いた山を歌う。²²

登山の対象としての山はエルヴィウから小説に登場すると言われる。「人殺しの山」一八八六というタイトルは山好きのものたちには不評である。が、作品としてはそれほどひどいわけではない。同名の巻頭作の他、「氷河の底の秘密」「ジューヴエの雄牛」「ボルザネート」「ルーダス兄弟」「プラローニヤンの谷の精薄児」「クランの鉄道」「ゲラルドメールの思い出」「トビー・ラュー」がこの小説集に収められている。が、登山自体はどの作品でも描かれてはいない。後の登山小説のように岩場をどうやって登つたか、どこでビザーアクをしたかと言つたことは出でこない。殆どが、アルプスの村の村人の生活情景である。表題作もそのひとつとして、シャモニーのホテルで見かけた光景と考えていいだろう。そもそも「人殺しの

山」というタイトル、或いは、訳し方が間違っているかも知れない。

新婚夫婦がシャモニーにやつてきて、夫が妻を残して山に登り、それきり帰らなかつたと言う話だ。話者が山小屋まで登つて、事故の様子を確かめて、麓のホテルで待つてゐる若妻に旗で合図をするところを、彼女の心を思つて、悪い知らせを告げずに去つたという結果で、「トリスタン」のモチーフだが、別に山である必要はなく、まさにトリスタンのよう舟旅でもよかつた。タイトルは「遭難」とか、「ある登山者の死」といつたものでもいい。のちに、オーディベールが、同じタイトルで、まさに岩場での遭難の話をするが、確かにここではタイトルが大きすぎる。ただ、このころから、登山がブームになつて、遭難が急増し、山というと事故死が想像された時代の物語である。それよりは、その後の、ガイドや牧童のはなしのほうが、山村の悲劇を雄弁に物語つて興味深い。氷河の話は、行方不明になつた客を案内していたガイドが客を殺して金を奪つたものとみなされてガイド組合から除名され、夫婦で村はずれの小屋に引きこもつて物乞いをしながら露命をつないで六〇年がたつたとき、氷河がかつての遭難者の遺体を村まで押し出してきて、老ガイドの汚名をそそぐという筋。小心な山男で人前でろくに話ができるないために、ガイド組合の聴聞会でも何一つ抗弁もできなかつた男が、村八分になり、美人の女房とともに苦難の人生を耐える話はなかなかに泣かせる話である。次の牛の話は、暴れ牛を預かつた老牧童が、山で牛に突かれて怪我を負い、誰も助けに来るものがいま死ん

で行く話。精神薄弱の少年の話もアルプスにとりわけ多い知恵連れの少年が、村人たちに愚弄される様子を同情を持つて描いた作品で、決してくだらないものではない。あと、呑んだくれの博労の話、かもしかとりの獵師の話、山の中に鉄道を敷設する話など、いづれも山村の生活を愛情を持つてよく観察して描いたもので、山岳文学史がそろつて罵倒するほどひどいものとは思えない。「誇り高く、独立不羈で、質実剛健、情にあつく、信義を尊ぶ」（一八五頁）山男たちの表情と山のきびしさとは十分に伝わつてくる。バレリーニらの山岳文学史家たちが酷評するのは山に登つたことのない作家が山の話をする事への反感であり、理由のあるものではない。

この年代のものでは、モーパッサンの「山小屋」、トウリエの「秋の恋」が、山の物語であるといつていいだろう。モーパッサンの作品はよく知られている。「秋の恋」は、山の娘と親子ほど年の隔たつた都会の弁護士の交情の物語で、かなわぬ恋をあきらめて山を去るに当たつて、前から登りたいと思っていた峯に登つてその地方に別れを告げる。娘は山の娘と言つてもそのあたりの地主の娘で、山も當時人気の避暑地であるエックス・レ・バンの近く、いわば、「避暑地の恋」と言つたところだ。このあと、しかし、もう少し本格的な山でもこの種のヴァカンス的情緒は、しばらくついて回る。都會人のしゃれた休暇としてシャモニーに来て、其處で、さつそつたる青年ガイドやスキー教師と一夏の、或いは一冬の情事にふける有閑マダム、或いは、山歩きの途中で目にした村娘を誘惑する都會

紳士の話、或いはさらに、山のホテルに避暑に来ている男女の間の火遊び。そう言つたものが、古くは、フロリアンの「クローディー・ヌ」がその第二のカテゴリーの走りであり、世紀末から第一次大戦前あたりまでは山と言えば、もう少しあとのコートダジュールと同じ雰囲気で、そう言つた作品が続出する。アンリ・ボルドーの「山岳小説」と称される「松の木陰で」「眠られぬ夜」などはその典型である。彼の山岳ものの代表作と目される「足跡に降る雪」でも本質的にはこのカテゴリーである。富裕な建築家が避暑地で土地の娘を見初めて結婚するが、女は都会の生活になじめず、ふとしたことで知り合った青年と山に登つて遭難する。そのあと、病院に駆けつけた夫が嫉妬に苦しみながらも何とかもの生活を取り戻そうと努力する話で、夫婦の危機の話としては、山は付け足しでしかない。²³

事故は海岸の釣り船の事故などでもよかつたので、似た雰囲気のサントリソリーヌの「高い敷居」で、夫にかまわれない寂しさを行きずりの青年とのつかの間の情事で紛らそとした女を夫が山の湖の釣り船の上から突き落とした話は、山も湖も同じような口実に使われているに過ぎないことを明らかにしている。(この話はちなみに、その後、悔恨に責められた男が、シャルトルーズ山系の牧童小屋に入つて、牧童の真似事をすると言う点で山岳文学にいれられている)。

但し、これは、アルピニスムの場合でも本質的には同じで、山村の生活と、避暑地の都會人の生活ではまるで性格が違うことになる。

エルヴィイウとトゥリエの違いで、ボルドーでも親しく見聞きした山村の獵師の生活などを描いた「死んだ家」「ダム」などと、風俗的な山岳小説の違いである。その間にあって、モーパッサンの「山小屋」は、一人で雪山の小屋に閉じこめられた青年の異常心理を描いたもので、登攀の途中で気が狂つて行く登山者の話などの系譜の走りと考えられる。

つまりここで、山の文学と言つても1・山村生活情景、2・避暑地の恋、3・登山の病理の三つがあることがすでに明瞭かになつたと言つてもいい。

このあと、ジオノ、ラミユス、プロアルは第一のカテゴリーの作品を書き続ける。ジオノは「屋根の上の軽騎兵」では歴史小説の枠の中で山岳地帯の旅を描いたが、これもやはり、山村の生活と言つていいだろう。ムティエの「旅のさなかに」は、まさにジオノ的な山の中の人生の旅である。山岳文学史にはなぜか取り上げられないが、ボスコ、ジャム、シャンソンもこの部だろう。カゼラの「二つの道」²⁵はガイドとして山村の生活を選び取つた都會の青年の話だが、二つの道のひとつはまさに、都會人の恋の火遊びであり、もう一つが、村のガイドの生活である。結末はもちろん、山に骨を埋める決意をするわけで、その点、フリゾン・ロツシユの名作「ザイル・トップ」「大クレヴァス」などの「ガイド小説」に属すると言つていだらう。広く言えば山村小説だが、山登りの描写もあり、登山小説とも言える。ガイドでもルナール夫人の描いたガイド(「万年雪」

の山」)は一年の大半を村で牧童として過ごす青年で、ガイドがまだ山登り專業になる前の話だ。またそれだけに、山とにらみ合って上り口を探す青年の孤独な戦いは、職業としてのものではない山を描いていると言つていい。

ペイレの「マッターホルン」、サン・ルールの「神なき山」「北壁」などはもう少し本格的なガイド小説である。但し、サン・ルールの描くガイドはもはや、村の生活を持たないプロのアルピニストである。トロワイアの「死の雪山」は山村の男の物語と言つてもいいが、山登りのプロとしてのガイドの小説と言つても間違いではない。但し、雪山での事故以来ガイドを廃業している老人が、飛行機事故の生存者を救いに山に登る話で、より人間的なドラマであるとも言える。遺留品目当てにともに山に登った弟はクレヴァスに消える。機体の残骸から救い出した唯一の生存者は老人が橇で下山させる間に息をひきとる。老人は自分の家に戻つて、その死体と一緒に過ごした後、はたして正確に事態を認識できるだろうか。昔の事故以来すっかり、痴呆化していたのである。今度の衝撃はもっと激しいだろう。事故や遭難を経験して手足を失つたり、精神に狂いを生じたガイドの話は少なくない。それもすべて客のためである。ガイドを雇つて遊山の登山をする都会人と、その遊山客のために命を投げ出すガイドとでは、おなじ山に登つても話が違うのは当然である。

一方、小説ではないが、スイス人テプファーの「ジグザグ紀行」は、都会人の物見遊山の記録で、「避暑地の××」と言うカテゴリー

に属するだろう。ドーデの「アルプスのタルタラン」もツエルマットに登るとは言つてもほんと、趣味的な物見遊山である。マルセル・サヴォアの「吹雪の中」は、事故を装つて人を殺した男が、山の中に隠遁するという、サントリーヌの作品と同じような話だが、其処で、たまたまであつた女と意気投合して恋をするのだから、構造としては「避暑地の情景」である。

ガイドではない村人のしかし、山に登る生活は同じマルセル・サヴォアの「強迫観念」一九三七に描かれる。山の農家の娘がスキの選手に恋をする。しかし、自分は醜いと思いこんでいて、男の目の前で崖から落ちて死んでしまう。ラモーの「ナダリーヌの情熱」も司祭に惚れた娘の狂おしい恋の話で最後は二人で雪山に行き倒れて死ぬ。

ガイドというのは、ルナール夫人の場合でなくともシーズン外は農作業をしている村人で、村での生活の情景が必然的に出てくる。都会人の山とはちがうので、たとえば、マックス・アルドベールの「砂漠の中の島」は、山に登る男女の恋でも第二章は「都会」と題して、まさにパリでの男女の愛を描いている。その背景のある男女が休暇に山にやつてきて其処でも複雑な情痴の世界を繰り広げるの、山村の生活とは無縁である。こちらはまさに「避暑地の恋」である。マックス・アルドベールはプロ並みの登山家だったから、本格的な登山小説も書いている。「岩場」などはそのひとつで、これは、厳しい条件下で、生死の境をさまようふたりの登山者の心理な

いし、病理を描いている。最後のカテゴリーに入る。コンスタンタン・ワイヤーの「死の乙女岳」(一九三二六)も同じだろう。二人の登山者が岩場で相手を突き落とそうとしてあらそとのである。ヴァンドリーの「パーティー」は虚無的な感覚の男が、山で、遭難者を見かけても救助に赴かず、町では、労働争議を指揮して、昔の仲間が経営する鉱山会社を破産させようとする。これを山の異常感覚とするか、異常者の山とするか、議論がわかれようが、あまり山の文學とは言えそうにはない。山の物語では、ムティエの「氷壁」(一九六九)も猿の仲の二人が山で危機的な状況を乗り越えて行く様を描いて、「山の病理学」と言えそうである。

山岳小説は一九三〇年代から六〇年代までが黄金時代と言うが、その間、ガイド小説が次第に後退して、山の病理学に取つてかわられて行く。そして、さらに、六〇年代を超えると、新しい山岳小説が登場する。ソニエの「奇妙な戦い」、モランの「この世の王国」(一九五四)、デズルベの「聖域」などである。或いは、山の幻想文學が登場し、ドーマルの「類推の山」、ミツシエル・ベルナノスの「死せる命の山」、サミヴエルの「靄」、マルセル・ブリオンの「山の彼方」などが現れる。其処に、ボスコの「イアサントの庭」なども加えていいかも知れない。

ボスコは、たとえば「猪」では、山を舞台に繰り広げられるジプシーと村人の争いをえがいたが、「イアサントの庭」では山中に人工樂園を築こうとするシプリアンの試みの失敗のあと、主人公がイ

アサントの導きのもとに山の中の隠された樂園を発見する話で、登山小説とはまたひとつ違った山を描いていると言つてもいい。ブリオンの「山の彼方」一九七二は、どこかアジアの奥地らしい僻地に繰り出した遠征隊が、「黒い女神」の祝祭にわきたつ町や、遊牧民の宿营地などを横切りながら、次第に禁じられた領域、あるいは、神秘の領域に近づいて行く話で、最後に山を突き抜けると、死んだはずの仲間と再会するのだから、其処は死の領域に違いない。ネルヴァルの「旅」をふまえつつイニシエーションとして展開する物語である。人は何のために山に登るのかという問い合わせに死を発見するためと言う答えを用意する作品とも読める。

ソニエの「奇妙な戦い」も何のために登るのかと言えば死ぬためであるとしか言いようのない展開をする。老いた登山者の山はカルドンヌの「永劫回帰」(一九二二)にもあるが、ソニエの場合は單なる昔の懐古ではなく、それまでの人生の意味を問い合わせ直すような作品だ。単独行の無駄な死と言うことなら、ルナール夫人の「万年雪の山」(一九一四)もそうだった。つまらない事故で歩けなくなつた青年は、誰か連れがいさえすれば助かつていた。老いのテーマはアンドレ・シャンソンの「道の男」にもあつた。大した山ではなく、昔歩いていた近くの山だが、老境に達し、妻を失い、もう一度、昔の山を歩いてみようとする。老アルピニストがガイドに年をとつて山に登れなくなつたら、そう言ってくれと言いながら、やはり、自分では老いを認められず、山で醜態を演じる話もある。ソニエは

「メイジュ」（一九五一）ではまさに山登りの心理を描いたが、「山の医者」（一九六三）では過去を回想するようになり、「奇妙な戦い」では、山に登つて死ぬ老人を描くに至った。老人ではないが、病人で山に登れば死ぬことがわかつていながら登つたのは、エストニ工の「田園の孤独」（一九二八）のなかの「ジャン・ブリュアンの場合」で、それにしても、山は格好の死の舞台として使われる。「奇妙な戦い」は、単独行の老人と山との対話で、登りはじめるところからはじまって、下山後自分の小屋で死を迎えるところで終わる純然たる登山小説ではあるが、その「山」は奇妙なほどそれまでの岩山、雪山とは趣をことにしている。主人公の視線の問題と言つてもいいが、鳥や、水晶や、雲やその他、主人公の目に触れるものを親しみを込めて描いており、体力の限界における岩との非情な戦いのみを描くものとはひと味違つている。²⁸

デズルベの「聖域」（一九九五）²⁹も、ひたすら頂上をめざすだけの登山小説とは異なっている。まず、作者も主人公も、処女峰征服に夢中になる青年期を過ぎ、今や、老境に近づいている。昔の山にのんびり登つてみると、余裕があるといつてもいい。がまた、山に登ることの本当の意味が見えてきたと言つてもいい。若いときは何の為ともわからず闇雲に登つていた。年をとつてみて、山との対話ができるようになつた。同時に山に住む山小屋の主や、小川や、小鳥とも対話ができるようになつた。山に登りながら、主人公は自分の辿つてきた人生をかみしめている。妻とともに登つた山、妻を亡く

した山、今娘が働いている山、そして、彼に人生の転機をもたらした山、今、慰安を与えてくれる山、インドネシアで調査をした火山、初登頂をした山、それらが、踏みしめる一步ごとに思い出される。山に登るとは、人生を追体験することだ。

山に登ることと、山に住むことは別だつた。都会の人間が山に登り、山に住むのは山の農夫だつた。ガイドがその両方を兼ねはじめた。山の中に山荘を建てて休暇や老後を過ごす都會人、或いは、執筆や制作をする芸術家の登場は山村に微妙な軋轢を生み出した。山住みでも山に生まれ育つた人間とは限らなくなつた。それでも、ボスコの描く画家は、どうしても山の中の村に受け入れられない。プロアルの村人は山に登る余裕など持ちたくても持てない。ジオノも登山は描かない。ラミニスの場合はアルピニスムの山に近くなる。が、アルピニスムは登場しない。この三人が山の文学を描いたのなら、シャルトルーズ山塊の山村を描いたバルザックの「田舎の医者」も山岳小説とすることになる。しかし、これはここでは除外したい。シャルトルーズ山塊がそこにあつても、人物は山に登ることはない。ジオノやラミニスの人物はアルピニスムこそしないものの、物語は山の中腹を登り下りする。天候の悪いときには遭難もある。ジオノの「山の戦い」「この世の歌」「エンネモンド」には確実に垂直の動きがある。ボルドーの描く山の獵師は岩山を駆けめぐる。山の中の人間の生活としては、登山家も牧童も獵師もかわりはない。

ある。とくに、初登攀に目の色を変えている青年登山家ではなく、山の生活になじんだベテランが村人たちと挨拶を交わしながら登つて行くときには、その目に映る景色は山に生まれ育った村人のそれとさして変わらないだろう。

山の様変わりでは、アジアやアメリカの山がある。フランスの登山家にとっては、エキゾチックな山である。遠征隊を組んで出かけ、地元のシェルバを雇つて、ヒマラヤに登る。そのとき村人たちの生活はシェルバの風俗以外脱落する。アルプスでもはじめはそうだった。英國の登山家たちが、大勢の登山隊を組んでやつてきて、

地元の村人をガイドにして、山に登つた。その後、山登りが都会人の流行になつて、いわゆるミーハー族がやつてくる。そのうち、流行が去つて、落ちついた登山者の静かな山がやつてくる。その頃は、山の獵師や牧童は姿を消している。

そのとき、ジャコテは静かに内なる山と対話を交わす。

この山の分身が私の心に住んでいる。

私は山の陰に身を寄せる

手の中に沈黙を掬う

それが私の中に入つてくるように、私の外に

広がるように、そして、しづかに清まるように

ジャムのピレネ、シャンソンのセヴェンヌ、ジオノのマノスク、

ボルドーのサヴォア、ラミュスのスイス。そしてジャコテのオート・プロヴァンス。フランス文学は山の麓にこそ、本当の文学を築いてきた。もちろん、登山小説でもフリゾン・ロツシュからソニエの「奇妙な戦い」まで独自な世界を切り開く。フランスに美しい山並みがある限り山の文学はなくならない。その山を越えて山の彼方の不可視世界に視線をこらす文学でも、ネルヴァルから、ブリオンに至るフランス独自の幻想文学が「精神の山」「類推の山」を築き続³⁰ける。

注

1 或いは、問題を置き換えてみよう。中国やインドには「山岳文学」があるだろうか。日本にはある。イギリス、アメリカ、ドイツ、イタリアには山岳文学がある。が、それはどこにでもではない。

2 「ビレネの狂女」の主題で一〇編以上の小説が書かれているが、その中にはサンディイの作に山村の生活が生きている。一般に「ビュドワ夫人の悲惨な生涯」以来、このテーマは山岳文学として注意されるに値するものを持っている。

3 一九六一、フライマリオン。同じくケベックのシユザンヌ・パラディの「叫び」も、ニュー・ヨークへ出た山の画家が自分を見失う物語だ。

4 日本で「海洋文学」と言いうものが殆どないのはなぜだろう。海に取り囲まれていても、大航海民族ではないからだろうか。

5 モンリブランにのぼつた最初の女性のほか、登山はある時期、都会の女性の憧れのスポーツになつた。

6 プロアルについては本格的に紹介し論評する必要がある。が、それは他の機会にゆずる。主な作品は、「春の嵐」一九三三、「人間の高み」一九三三、「アルノー家の人々」一九四一、「ロンバルドの吹くところ」

- 一九四三などである。
- 8 7 一九八六、優れた論考だが殆ど、小島島水一人を論じている。
- 8 ジャン・ダラスの一三九四年のテクストは、いわゆる「メリュジー
ヌ物語」のあとに、妖精の子供たちの武勲を連ねて延々たる武勲詩と
している。それでも、そのうちのもつとも主だったジョフロアは、蛇
の天敵としての猪を象徴としてもち、メリュジースの敵役として十分
に機能している。
- 9 十三世紀のエティエンヌ・ド・ブルボンにアーサー王が化け猫を退
治したとの記述がある。ヘネットはそれについて、土地の名から出た
付会の伝承であろうとする。(「サヴォア地方の民間伝承」)
- 10 A T 三〇三。
- 11 クレタの有名な蛇をもつた女神のテラコッタは、「山の女神」だとも
一言われる。
- 12 イヴ・ブレッシュ「サヴォアの伝説と昔話」一九八三
- 13 ドモアゼルないし、妖精の煙突というのは、雨水で浸食され多地層
で岩石で覆われたところだけが、円錐型に残ったものを言うが、「乙女
岩」というと、女陰を思わせる割れ目を持つた岩をさすことが多い。
- 14 「佐渡の昔話」中、峯村の伝承、「うわばみ女房」ほか。
- 15 一番多いのは三四番の「麗しのウラリ」だが、四〇一でも出る。
- 16 そこでは、鉱物資源から、森林資源、酪農、狩猟と辿って、そのあ
と、洪水、雪崩、落石、地崩れ、嵐等々をかたり、また、雪を戴く銳
鋒の美しさを賛美する。
- 17 人生に絶望して死を決意した青年が山に登つて、行き倒れとなり、
救助されて聖ベルナル修道院に収容される。そこで、もつとつらい
話があるのでして、修道僧が自分の物語をする。許嫁の母親のほう
が好きになつた青年の話だが、その思いに決着を付けるべく彼が修道
院に入ったあと、捨てられた娘が結婚した相手が、今、行き倒れにな
つた青年だった。キュステイヌの一八二九の作。
- 18 サントリープールの批判した文章がアルランクールのテクストに見付
- 19 この作品の失敗(一八四三)がロマン主義の終焉を告げたことは周
知の通りである。
- 20 「旅行」というフィクションのジャンルがあり、古くはシラノ・ド
・ベルジュラックの「日月旅行」から、或いは、「オデュッセウス」ま
でさかのぼる。サンドの「ある旅行者の手紙」ネルヴァルの「東方の
旅」は、その系列に連なるフィクションである。それに対して、現実
の旅行記はフランスではあまり発達しない。しかし、山の小説の場合、
実録かフィクションかで偽物・本物議論が山好きの人たちの間でかわ
される。誰その作品は山に登つたことのない人のでつち上げだ、云
々というものだ。
- 21 ロス・チエンバースの「旅の詩学」一九六九に「ネルヴァル」と
て、山の観念は人類の間の、今は失われた調和の観念と不可分に結び
ついている(九九頁)、と言う記述がある。ネルヴァルに取つて、坂を
上ることは至福感と結びついていたというは、シェーファーの指摘
である。
- 22 ジャン・リュック・スタインメツが「デュ・バルタス論集」の中
で、この詩をデュ・バルタスの原詩と比較対照して論じている。国立
図書館蔵のデュ・バルタス詩集にネルヴァルの書き込みが残されてい
るが、ネルヴァルはこれを借りて、書き写したものと思われる。その
際に書き間違えたのか、後に自分のメモを読み間違えたのか、或いは、
意図的な書き直しか、ともかく、デュ・バルタスの詩の引用の部分が
だいぶ原詩とは違つている。
- 23 但し、男女の愛の葛藤の激しさが険しい山の姿とそこでの生と死の
ドラマによつて描かれているなら話は別である。「マンフレッド」など
は、その趣があろう。が、フランス文学の得意とする恋愛小説はあま
り、アルプスの壮大な自然を必要とはしないようだ。
- 24 ラミユスはすべて山の文学であると言つてもいいが、「デルボラン

ス」「高地の戦い」「ファリネ」「山の恐怖」「もし日が昇らなければ」「ジャン・リュックの迫害」などがその代表的な作品とされよう。

25 「この世の歌」「この喜びをいつまでも」「山の戦い」などが、ジオノの「山の小説」の代表的なところであろう。

26 優れた幻想作品だが、同じ話が、「サヴォアの伝説と昔話」にある。この地域の伝承をもとにした話だろう。サミヴエルは長編「エデンベルクの狂人」でも、民間伝承をうまく使っている。それ以上に、観察者としては（生活者ではないと言う意味だが）例外的に山村の生活を活写している。

27 「山が彼の全存在を吸い取つて、彼のかわりに存在する。」「彼は山顶よりも高い頂上をめざしていた。」「頂上をきわめてから、あと、ずっと山より高く登り続けていた。」二三三頁。

28 タイトルは「高いところ」とも訳せる。

29 ラモーの描くビレネの麓の館に住む貴族の末裔、ジャムの描く、同じピレネの麓の貴族の娘、彼らは山の人間なのか、都会の人間なのかにわかには決めがたい。

30 他にももちろん、ランベールらのスイス文学があり、ケベック文学もある。ベルギーの作家ではしかし、山について語るものは少ない。

補注 猫の名を冠した山では、広島に「猫山」があり、化け猫が人を食つた伝承がある（「日本伝説大系」）。また、磐梯山の隣に「猫魔ヶ岳」がある。